川柳雜誌

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十二年十二月一日發行　第十四卷第十二號（毎月一回一日發行）

川柳人協會特輯號

師走川柳大會實況

NO. XII VOL. XIV

清酒
白鶴
ハクツル
發賣元
嘉納合名會社
大阪・東京・神戸・京城・仁川・大連・奉天

川柳雜誌　特輯十二月號目次

師走川柳大會實況……亞鈍記…(二)

講演　東魚・溪花坊・紋太・福造・路郎

選句　艸樂・塊人・東洋鬼・文久・綠雨・大研子・麥魚・京二・百雷

○

武玉川三篇研究（十二）

梅本秋農屋　森東魚……(二三)

蛭子省二　編輯縱橫……(三〇)

社關係の人々……(表三)

川・雜・案・內……(三〇)

川・協・の・頁

柳人素描……(一九)

(一五)福田山雨樓君

(一六)須崎豆秋君

柳界展望……(二九)

○

不朽洞句抄……麻生路郎……(七)

近作柳樽……麻生路郎選……(九)

川柳塔……諸家……(一六)

一路集

工事……森東魚選……(二三)

支店……村松夢裡選……(二三)

各地柳壇……(三四)

講演者・選者・大會委員

同情週間 師走川柳大會實況

主催 川柳人協會
後援 大阪朝日新聞社會事業團

此夏以來の征戰。上海敵前上陸した其後の皇軍の破竹の進擊敵の首都南京陷落も今や目睫に迫つてゐる。戰勝景氣で俄然北濱の株が跳上り、そこで久しく笑を忘れてゐた川柳人達も、大阪朝日新聞社三階の大廣間で開催される師走川柳大會に京阪神地方から續々と集つてくる。十二月三日夕六時。定刻前、既に空席を埋めつくしてしまつた程の盛況だ。

正面右側に兼題、左側に席題が誰の筆か實に墨痕鮮やかに書き下されてある。選者の名前が各題の下に發表されてあつて、彌が上にも作句意慾を唆る。講壇の前には當夜講演される諸先生や、披講される諸先輩が正面きつて、づらりと居並ぶ。兼題締切七時、席題締切七時半。ボマードの青年、角刈、長髪、坊主頭、種々雜多な頭から絞り出される種々雜多な知能が各自の句箋へ五字七字五字にと刻み込まれる。老若男女無差別、階級職業無差別。只川柳の醍醐味へ一勢に入らんとする百七十の生命の何と靜寂たる一瞬時であらう。酷寒遽に襲ひ、今宵も巷街は凍てつく舗道と凜烈皮膚を破る師走の風だ。七時半を二十分遲らし席題が締切られた。大會委員達が數條の長い卓子の間を縫つてそれぞれの受持つ題を連呼して句箋集めをする。血色に燃えた朝日の徽章を胸に止めて今夜の委員さんは洒落れてゐる。綠雨、艸樂、里十九、丹路鮎美、變人、潮花さん等の馴染みの顔が右往左往する。受付では葭乃女史を始め、よし江、美奈子さん等の閨秀川柳人の優しいとこで以つて、腹の底まで冷へきつて來た參會者達を先づ温めて吳れたのであつた。一般會衆に交つて、大會委員である筈のかほるさんが、例の如く女性の姿態を作つて椅子を淺く斜めに腰掛けて居る。人前で動き廻るのが御婦人のやうに御羞しいら

しい。かぼろさんの前には社會大衆黨の市會議員が、どつかり坐つてゐる。庄万よし氏だ。その向隣りの卓子に、いとも嚴肅な顏をして、阪大の長崎柳秀博士が端然として坐すといつた格好。今夜の白髮頭は、この柳秀博士と、古川柳、殊に柳樽研究家の權威、花岡百樹氏の御二方だ。他に川・雜の客員高尾亮雄氏が來會してゐられたが、これは頭に霜が降りてゐる程度。

句會集めも終り、會堂の大時計が八時を示すと、萬雷の拍手を浴びて、愈々路郎師が登壇される。今回の師は主催者である川柳人協會理事長として開會の辭を述べられた。即ち目下の支那事變下に於ける數多皇軍の犧牲とその銃後に於ける掩護事業は擧國一致で敢行されてゐるが歲末に特に惠ぐまれない氣毒な人達を深思し朝日新聞社の同情週間に今夜の會費を醵金する事を述べ、尙、先月末の豫期しない防空演習中による大會準備の不充分であつた點などを詫びられて、その行届いた挨拶を、而も簡單にして降壇された。全く防空演習は吾々國民にとつては避け得られぬ。だが今夜の合同句會が、全國各吟社の川柳人協會に加盟し得ず、準備も充分時日をとり得なかつたに拘らず、此れ丈の盛會を京阪神在住の川柳人によつて爲し得た事は、多幸とせねばならぬ。それはさて措き、名司會者の定評ある後藤雷兒さんが何か言つてゐる。今夜、御來會の先輩方の揮毫を、一般の希望者に頒つ事になつたのださうだ。お次は講演。川・雜客員、森東魚氏がトップ。稍々もすればべらんめい口調にならんとするを押へて齒切れのよい江戸辯だ。「飜譯川柳に就て」最近柳壇で問題になりつゝあるトピックだ。流石に大將、當てやがつたなと、傾聽する。舌が廻る〳〵。言葉が機關銃のやうに飛ぶのだ。これぢや支人の速記者だつて、ペンを折るだらうだが論旨は良く判る。左に概略の要旨を記す。

言葉の味はひは矢張り母國の言葉でなければ味はへないので味はひといふものは完全に外國語に飜譯できないと思ふ。『町内に知らぬは亭主ばかりなり』の町内といふ意味に就て外人に知らす事になれば註を附すといふ手もあるが、言葉の醸す空氣なり味はひといつたものは註にする理にはいかぬ。例へば大阪のもつ味はひは大阪の言葉でなければ駄目だ。『ぼろくそや』といふ言葉が、—非常にたやすい事だ—、と言つたんでは何にもならぬ。其他、『えらいけや』、『おーけに』等々。結局川柳を外國語にするには、外語で川柳を作ればよいといふ人もあるが飜譯する川柳は、飜譯するに可能な川柳を選べばよい。其處で古川柳よりも、現代川柳に限る方が、古句より近代句に氣分の共通したものがある故に譯し得ると思ふ。然しそれには、句を選ぶ人及び語學が確かで飜譯され得る人を俟たねばならない。

最後に「川柳雜誌」十一月號の近作柳樽から、比較的飜譯され得る句を拾つてみると、『見上げれば一つ開いてゐビルの

寫眞說明（於大阪朝日新聞社三階大廣間）

（向つて右より）前列—蓼魚、京二、文久、溪花坊、福造、紋太、塊人、百雷、東洋鬼、萬よし、二列—綠雨、美奈子、東魚、葭乃、艸樂、路郎、大研子、白峰、青兒、三列—潮花、紫香、ライト、アート、いわを、丹路、夕鐘、鮎美、變人、水客、かぼろの諸氏

窓』（紫香）『戀人はないが朝の窓に寄り』（しとし）『噴水のクルクル太陽の眞下』（素天）『嫁きおくれ其れでも母になる心算』（潮花）『夏になり切つた會社の朝子掛』（溪月）『性格の一つなんでも黒がすき』（南海男）以上擧げたやうな句であらう。殊に『性格の……』はもつとも面白く讀譯して効果的なものであらうと思ふ。

以上、東魚氏の興味深い漫談的講演を喝采裡に終れば大阪「川柳國」の主幹本田溪花坊氏が羽織袴の和服姿で登壇、「師走の心もち」と題して、歲末に於ける氏の心境を述べられたが、これは氏の心境こそは又川柳人一般の氣持であつて、昨今の事局を考へれば川柳などやつてゐられないと言ひ、又銃後の意氣を叫ぶ人達もあるのであるが、古川柳に「大佛は觀るものにして尊ばず」とある如く、川柳をたゞ白眼視するものでなく、吾々は此場合にあつても、川柳の良さ、尊さを知り、且つ樂しみ得る喜こびを持つものだ。と結んで降壇。第三番目を受け持つたのは神戸の「ふあうすさ」社の楫元紋太氏だ。題して、「私の句」。輕い思ひ付きですから氣輕に聞いて呉れと、冒頭してから、己惚れるといふ事を戒めて、神戸の青年團に掲げられてある團報を引用し、尙氏の最近の經驗として、風呂屋の鏡で久しぶりに自分の顏をつく〴〵覽めて考へ込んだ事は、廿才前後の青年の頃に持つた己惚れと、現在持つてゐる己惚れとは、形こそ變つてゐても、依然として己惚れが自分に存在してゐるといふ事であつた。何となれば、色氣の方は多少己惚れが若い頃より無くなつたが、然し、地位や名聲などに變つて己惚れば出てくる。五、六年前、「己惚れの神經鈍くならぬもの」といふ句を作つて自ら自覺、反省してすつかり己惚れを棄て去つたつもりでゐたが、風呂屋の鏡をみてゐるうちに、まだ〴〵棄てきつてゐないといふ事が判つた。己惚れも良い意味で自信といふ言葉に置き換へられるが先づは今夕の御挨拶がわりに。と巧みな隨想を、そのまゝ小品にしても良いやうな枯淡なところをみせて、降壇。

これで講演者の前半が終る。待望の兼題披講に入る。呻樂、塊人、東洋鬼、文久の諸氏が交るがわるに起つて披講する。川柳は時代の觸覺だ。流石に、事變色が出てゐる。一題の披講毎に賞品係が、入選者に賞品を配る。賞品係の元締め、里十九さんも大抵ぢやない。披講が終ると、講演の後半に入る。京都の藤本福造氏が講壇に起つ。拍手

だが、氏は顏を俯伏した儘一氣に原稿を讀んでゐる。「私の好きな句」といふ演題であるが同情のない句、殺伐な句、穢い句、非國家的な句が嫌ひでその反對なら好きである。エロでも桃色でも可い、人情味のある、明らかな、すが〴〵しい句が好き。と結論されて、降壇。講演最後に廻つて、アンカーは誰あらう、吾等の路郎師だ。問題も大きい。「川柳人協會に就て」。だが時間も豫定より遲れてゐるのに、師に充分な事が言へるかしら。氣に懸る、だが此れは最も重要で、當夜會合に出席できなかつた方々及び地方の柳友達に知つて貰ひたいと思ふが故に講演の概略を別に掲げる事にした講演後師は着便したばかりの松山の前田五健氏の色紙繪の披露をされ、此等の數點も最後の抽籤の時に加へる事にして樂しみを後に殘す。次いで司會者が今回の催に寄せられた祝電祝辭

が讀み上げた。上京中の岸本水府、東京川・雜支社長の福田山雨樓、川・雜臺中支部の宮内耕朗、大連の大島濤明、大阪府の西村山月、中西おさむ、東京の柳友會同じく東京の川柳譯研究會の阿部佐保蘭の諸氏等…。以上祝電が終ると今度は席題の披講である。綠雨、大研子、麥魚、京二、百雷の諸氏によつて佳句が朗吟される。精しくは兼題と共に次號によつて知らる可し。いや實にスピーディに目先の變つてゆくプログラムの運行よ。とても小用にも行けないのである其間に路郎、塊人、紋太、柳秀東魚の諸氏の揮毫、小川武氏の漫畫などが、色紙、短册に戯つて、後の幕にピンで止められてゐる。此奴は、買はないまでも抽籤に當らん事も考へて觀て置く必要がある。最後に呼び物の即興漫畫だ。川・雜漫畫クラブの、北みきを、竹中アキラ兩君登場する。會衆に出鱈目な落書さして其奴を漫畫に直ちにしてしまほうといふのである。豫想した如く、いの一番に里十九さんが飛び出して、筆で大阪市の市標を書く。アキラ君が加筆すると忽ちにして村祭の神社にみる篝火に變つてしまふ。へのへのもへのの、あの子供の頃にやつた本當の落書をした者があるとする、それを、みきを君は事もなげに支那の兵隊さんにしてしまう。星が戰車に變り、「川柳」と書いてあつたものが、伊太利の旗を持つた兵士となる。最後に意地悪いのがゐて、紙の右上角隅に丸、眞中に四角、左下角隅に三角を小さく書いた。とたんにそれが、みきを君によつて支那事變の地圖に早變りしてしまつた。この機智には一同唖然とした。

時に十時半、お待兼の福引は麗人よし江さんの纖い白い指先によつて、抽籤される幸運の女神は誰方に微笑みかけるや。散會十一時。諸先生及選者、と大會委員の記念撮影をもつて昭和十二年度の師走川柳大會の幕は完全に閉じられた。今や世界地圖が一變しやうとする此歴史的事變の勃發した年に於て。路頭に出れば、此地は中之島の中樞である。朝日新聞社に續いて朝日ビル。北側に廻ると朝日會館が、眞黒な姿で立つてゐる。軌道を隔てゝ中央郵便局、堂島川を越えて阪大病院遞信局だ。だが最早これらの巨大な建物は眠りに陷つてゐた。

（亞鈍記）

☆　☆

大會情景（12月3日於大阪朝日新聞社三階大廣間）

長事理路郎生藏る話を協川

川柳人協會に就て

麻生路郎

大分御疲れの事と存じますので、斯かる演題は恐縮いたしますが、ホンの暫くの間御清聽を煩はします。御承知の如く昨年の七月以來提唱してきました川柳人協會に就て、その理事長としてやつてきました事が甚だ微力であつて、ほんの序の口といつたところ、今夕、時間を少し割いていただいて協會の事――内容の精しい事は迚も長くなつて二時間や三時間では六ケしいそれは川・雜毎號に執筆してゐる記事で御諒解して戴くとして――ただ川柳人協會が何故必要かといふ點に就て申上げたい。

社會のどの方面にあつても全体をひつくるめるものがあります。文具屋には文具屋の組合があり、書店には書籍組合、があるといふ風に川柳壇の横の運動をしやうとして協會が創立された譯です。

私は過去十四年前、川柳の社會化を提唱し、一面社會に對しては誤まられた川柳觀をただし川柳家に對しては理由なく虐げられる事の非などを叫んで、全國を行脚したものですが、只今では川柳の社會化運動の必要もなくなつた位に、全國に一般に普及されました。それで、川柳雜誌社も、先年十周年記念事業の一つとして東京句會を開催し、從來採り來つた川柳の社會化運動は一ト先づここで打切らうといふ事を宣言したのです。然し川柳が鮮滿、遠くはアメリカまでも擴まつていつた結果は、川柳のレベルが、必然的にいちぢるしく低下しました。この際、川柳人は打つて一丸となり、川柳のレベルを上げる、これが川柳人協會設立の趣旨である。百人のうち九十九人までは、川柳では衣食してゐないといふ事實が川柳の向上發展の上に弱いものになつてゐるといふ事も考へさせられるのであります。畫家や音樂家、殊に同じ文學藝術家である俳人や歌人の如く、川柳が川柳人の生活上の仕事にされなければならない。各吟社では俺の吟社だけが益すれば可いといつた、銘々勝手な事をしてゐたんでは、凡そ意味ない事であります。（講演時間切迫を意識された師は次第に此邊より、言葉のテムポが早くなる）

何分精しい事、疑問の點は、御質問があればいくらでも、どんなことでも説明します。川柳壇がこのまゝでは實際に於て墮落するばかりで、曾ての文化文政の頃のやうなものになつてしまうでせう。吾々川柳人の共同責任として、これは何とかしなければならないと痛感するのです。今私はその意味に於て、川柳人協會の具体案として、全國的年刊句集の刊行、川柳會館の建設、選者の選定、等々のやうな問題を取上げたいと考へて居ります。川柳人協會は私個人の仕事ではなく、オール川柳人の肩にかかつて來る問題でありますから適任者があれば微力な私如きはいつでも後方勤務に移つていゝと考へて居ります。甚だ固苦しい事を申しましたが、微意あるところを汲まれ、御盡力を乞ふ次第であります。（拍手）

（大會講演要旨亞鈍文責）

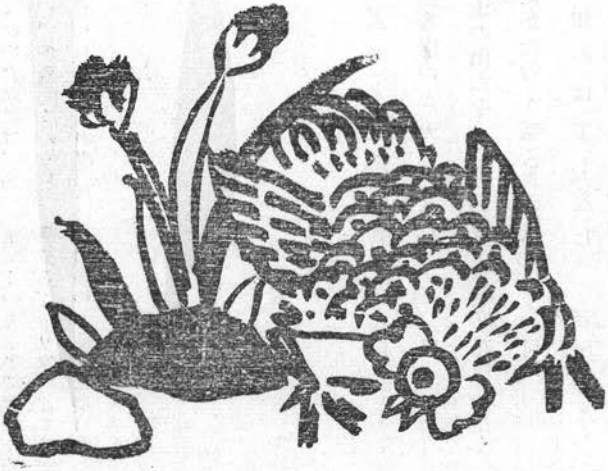
不朽洞句抄

麻生路郎

十二月に
キリスト傳を貸す人よ

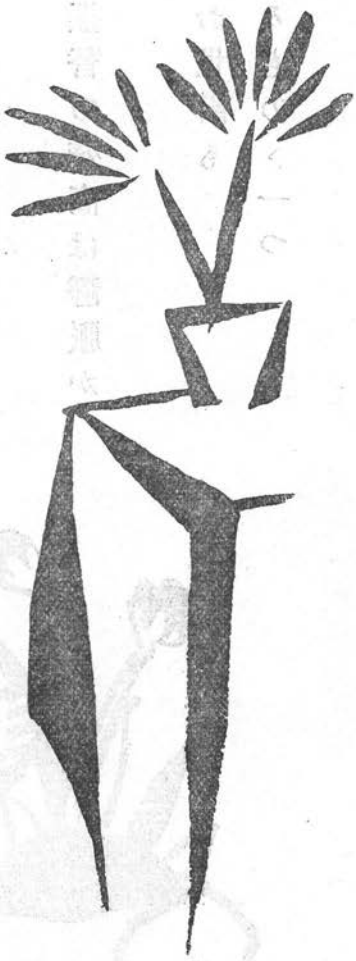
師走の振替の殘高は靜脈か

銀行のお世辭も
氣の腐るものゝ一つ



近作柳樽

麻生路郎選



泥棒の邪魔をしてゐる錠前さ　大阪　川村　觀月

もう酒はのまぬと思ふたのは今朝だ　同

鳥居から二度目のおじぎしてかへり　同

闘ひへカとたのむ會社ゴロ　同

旅僧の姿は額の字を見上げ　同

義勇奉公丸刈青い赤襷　大阪　富本　無煙

冥福を鐘に托して亀の水　同

蝙蝠が飛んで本堂鍵の音　同

借りて來た鋸も内のと大差なし　同

長屋まだ戰士の出ぬをくやしがり　名古屋　花岡　堯子

心すでに君にかたむく嘘を云ひ　同

萬年床空想のはてしなし　同

出征へ初めて社長の手をにぎり　同

熊笹へ松葉さした子と出合ひ　大阪　丸尾　潮花

兎も角も妻にまかした歳の暮　同
あすからは春だと思ふ鐘を聞き　同
暇のある手を毛糸へ頼まれる　同
内金を收めて屋台車借り　尼崎　酒井斗風
植木鉢ならべて夫婦子供なし　同
柘榴の實親子で落す日曜日　同
お師匠はん息子の嫁に手をひかれ　同
青訓へ主人理解がなさすぎる　名古屋　鈴木可香
三ヶ日からだます眉引く　同
白髪一本二本女を思ふまい　同
逆ふてみる氣になれぬ父の老ひ　同
生きるためよとハイヒールの眼　大阪　石田沐天
感傷譜かけて場末に容もなし　同
今日はまた意外な同志召されたり　同
滿員車赤い襷にゆづり合ひ　同
平和そのものゝ姿よ日章旗　愛媛縣　酒井肱水
新聞へ何時か鼾となる疲勞　同

患者もう家庭療法する氣なり　同
エプロンのポケツにしまふ子の秘密　同
にわか雨白い素足が目に止り　大阪府　毛利稔幸
通勤の電車の音で場所を知り　同
シグナルへ同じやうに倒れかけ　同
たまに着る背廣巡査は子を連れて　尼崎　酒井美知夫
紙芝居酒の使ひを忘れさせ　同
鏡臺の上に男のものもあり　同
菊人形にも軍國の色が見え　大阪　今井菊路
女學生喋べりつゞけてバスを下り　同
國婦會亭主の留守を出て歩き　同
靴下をはいて褞袍が短かすぎ　正本水客
家建てることに夫婦の氣が合はず　同
寢轉んだ下から蝗ひとつ逃げ　同
交叉点君は向ふに彼とゐる　下關　櫻川不水
集金に只義務的に禮を云ひ　同
タイピスト最後の一字氣合かけ　同

近作柳樽

石段を登りつめたる有難味　大阪　岩橋最美地
たなびくは煙日の出のあつけなし　同　同
己が身に照らす記事あり終電車　同　同
日向ぼこ猫の伸欠をうつされる　大阪　竹内美津枝
小ちやな手小菊へのびて父の聲　同　同
よち〳〵と歩いて親は手をたゝき　同　同
三着の服で恩給迄勤め　長野縣　林　幹
何様の葬儀巡査も花を持ち　同　同
居住まいを正す弱味の應接間　同　同
借金の中で子供のものが買へ　名古屋　中西　周鈴
たいこ持ふられた猪口をしやれて受け　同　同
貧乏にせめて御飯は温かし　同　同
近づけばこの人さへも金が無し　尼崎　山田南濃路
菊咲いて内風呂の首寒いなり　同　同
信仰の母にさからひ注射する　同　同
今呉れたビラの喫茶を横に抜け　大阪　黒川　紫香
發車ベル四五人あわてさせて鳴り　同　同
一盛りになつた果物値が落ちる　同　同

空箱へパセリを蒔くも都會かな　愛媛縣　由利　孝輔
出征の姿へ母も居て欲しし　同　同
綻びの繕ひ妻の糸切齒　同　同
來客へ花瓶を少し動かしぬ　大阪　田中　風葉
唾付いた風船父に吹かす也　同　同
特務兵唯默々と馬と行き　同　同
呉服屋の株式會社とは見えず　名古屋　稲垣　正穂
父さんは戰地に居ます燒芋屋　同　同
ネクタイを結んで呉れる髭匂ふ　同　同
附き添ひは窓を覗いて氣がまぎれ　奈良縣　嶋田　翠峯
秋晴れに勇士の母は障子張る　同　同
眼科室目に悪い本積み重ね　丸亀　馬場　浪二
懐は淋し師走の慈善鍋　同　同
非常時に生れ萬歳から覺え　大阪　北川　春巣
犬好きは犬の小便待つてやり　同　同
屋臺ずし聞けば出征家族とか　東京　風間　花盈
わからない客へ主人が代つて出　同　同
留守番をみながおどして出發し　朝鮮　弘津　慶一

引越の手傳然もちと動き　同
友情のうれしき邪魔を仕に來たる　大阪　大坂　形水
本能は手の屆くとこみな破り　同
男性美皆非常時と云ふ頭　尼崎　飯尾寄與史
慰問女兵隊サンと太く書き　同
よく出來た案山子地主によく似たり　愛媛縣　米澤　曉明
弟の首途へ並ぶ兄の肩　同
濱の音だけは變らぬ久しぶり　大賀府　宮岡　公子
白熊と菊とほめてる公休日　同
仁丹が芯になつてる袂くそ　大阪　野木　呑水
數の子よお前は不運な生だつた　同
受付も勸誘と知る冷淡さ　文庫
失職は道草食つて居る姿　同
號外の聖旨の文字を拾ひあぐ　大阪　福井　尺琴
御用聞せめて女中を威張らさう　同
兄よりも多い稼ぎを皆使ひ　松山　勝谷山川兒
月の路月の壁二人行く　同

仲裁へ萬事白紙で任しきり　大阪　米谷松太樓
廢物へ利用の出來る智慧を貸し　同
初あられ戰死のさまが眼にうかび　大阪　山本　葉光
戰死者の他人も夢を見たと云ふ　同
日本刀見つめて明日は花と散る　愛媛縣　岡田　浮草
千人針トツプリ暮れて子と歸る　同
砂煙騎兵の雄姿かすみ行く　愛媛縣　笠崎虹絮子
氣を變へてからはヤリクリ面白し　同
親不孝者の戰死を母は褒め　東京　成田　牛若
貧乏をはつきり辨當箱へ知り　同
春の雨路へネオンの灯がきれい　大阪　谷川　曉香
開放を禁ず鼾がもれてぬる　京都　小坂ふじ彌
お任せをしますと娘座を外し　大阪　竹内　春坊
一畝は隣で借りた鍬でたり　下關　多田市他樓
職長に坐つたところを見つけられ　大阪　馬越　華蝶
言ひ譯を皆非常時にしてしまい　長野縣　佐二木千隈
大賢は愚に似たり愚は賢に似る　神戸　西脇　提象
ぶぶ漬が十二時迄のエネルギー　豊中　金田　並木

武玉川三編研究（十二）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(184)　水に寄るわか黒髪も二ツ折

秋の屋＝「くらべこし我が黒髪も肩過ぎぬ」の、筒井筒の故事で、「二つ折」は、髪の根を束ねて、それを前の方へ折曲るをいふ。

東魚＝「二つ折」は分らないので自説はない。前説の如くならば、年たけて昔なつかしい、井筒の邊りに立寄つて、懐舊の情にかられた心持ちであらうか。

省二＝お説の如しと思ふ。元錄文學辭典「扇屋の萩野後れ毛の二つ折に髪先長く」（二代男）。言泉「當世の若衆…二折の髪の結振り」（若風俗）。故に遊女も若衆も結つてゐた事が察せらる。

(185)　瀧の調子の狂ふ荒行

省二＝いかに大死一番の荒行であるかゞ判る。瀧の落つる調子が狂ふ程、眞劍にして物凄し。文覺上人などを思はせる。

秋の屋＝豪宕雄大な光景で、演劇ならば大薩摩が一くさりあつて、淺黄幕を落すところである。

東魚＝豪快な句である。好きな句の一つである。

(186)　酒にする氣てぬるい雪

省二＝後で酒を呑むつもりでゐるのでは、雨師もきゝ入れては呉れまい。贅澤な、なまぬるい雨乞ではある。（「ぬるい」は説明的であるが、「酒にする氣」と率直に告白して居るのに、添つて居るであらう。雨乞の句としては珍らしい方だ）。

秋の屋＝一村の若衆等が遊戯半分で、効驗も無さゝうな雨請である。

東　魚＝この句も面白い。「ぬるい雨乞」の措字が巧みだと思ふ。

(187)　**言たてに一ツもならぬ戀の闇**

省　二＝言ひ立てる口實には、一つもならぬところが、戀の闇の夢中さではある。

秋の屋＝戀の闇の事情は、明るみに出しても通用されぬ

東　魚＝表向き言ひ立てになるやうな事はない。實は戀の顚末を云ひたくはあるが、人前で云はれぬ。嬉しいやうな物足らぬやうな心持。

(188)　**漸〳〵と臍の緒落る雛の主**

省　二＝雛節句前に生れた女の子。やはり初節句の祝の喜び。

秋の屋＝餘りに早手廻しの雛祭である。

東　魚＝かういふ實例は隨分ある。『お年づよ產着に雛か添てくる』(樽四七)がある。

(189)　**奇麗な京に高い小便**

省　二＝京の立小便など〻云つて『不二額田子へまたがる京の嫁』(古狂句)とあるが、「高い小便」は栄と交換した意である。この句未だ「奇麗」とあるから好いが『きたない國は小便を汁へ入れ』などとも古川柳はよむ。

秋の屋＝奇麗な点に對して「高い小便」と云つたのは、少し調和しない。外に何とか云ひ方が有るであらう。

東　魚＝「奇麗な京」と、あんまり巧な修辭とは云へない。

(190)　**退いた狐の急に餓へる**

省　二＝論語に「食饐而餲」で、飯がくさりかけて、すえてくるのであるが、此の句は餓ゑると讀ますのである。人間を化してゐた時分には、食物に困らなかつたが、退いた後は、急にひもじさを覺えるのだ。

秋の屋＝狐憑病が快癒して、急に飢渴を訴へるといふので、狐がかつえるのではなく。患者がかつえるのである。「餲」は「渴」の當字だ。

東　魚＝狐がもう馳走にありつけなくなつたと云ふ方に考へてゐた。或は「急に」とあるから、秋翁說が正しいのかもしれぬ。

(191)　**礫のやうな法の返答**

秋の屋＝禪僧の問答で、突然に難問を出すのが、さながら礫を擲つやうだ、と云ふのであらう。

東　魚＝突如として飛ばす問、礫のやうなとは云ひ得てゐる。

省　二＝危機一髪の禪味。

(192)　小性の棹て水門を出る

秋の屋＝俗説にある五代將軍綱吉の、朝妻舟のやうな遊興に、御庭の泉水に浮べた舟に棹さして、水門の外に出て見るのである。

東　魚＝家老共には内々で、邸外へ遊びに出る趣が思はれる。「小姓の棹で」は良い感じである。

省　二＝即興滿喫の樣子が「小姓の棹」にて表示し盡されて居る。

(193)　暖な咄して行鉢たゝき

省　二＝幾年目かには、非常に暖な冬があるものだ。今年は溫かで樂な事ですなどゝ、鉢叩きが話合つゆく。

秋の屋＝寒くある可き冬の鉢叩が、暖な咄をして行く處に興趣がある。

東　魚＝和やかな氣分の良い句である。春近くなつた心持ちであらう。梅なども苦みを持つてゐる趣も想像される

(194)　芦分舟のいたいめをする

省　二＝葦の茂つて居るのを、分けてゆく船であるから漕いで居るものは痛いめをする。『氷つく芦分舟や寺の門』（太祇）

秋の屋＝痛い目をするのは、舟頭の方であつて、舟その物でない事は云ふまでも無い。

東　魚＝痛い目をすると、何のきどり氣もなく云つた處が、却て面白いのであらう。

(195)　嵐の卷て通る小むしろ

省　二＝嵐が小莚などを、吹き卷いて通つてゆく。（卷き揚げてゆかぬところが、おとなしい）。

秋の屋＝此の「嵐」といふのは、旋風のことであらう。

東　魚＝嵐は一陣さつと吹き來つた風とみてよろしからう。小莚を吹き捲くと云ふ處に、爽然たる初秋の氣分がある。

(196)　佛より先に言るゝ毘首羯磨

省　二＝帝釋天の臣、建築や工作物を司る神。この佛樣は毘首羯磨作でと、佛樣の名よりも先きに、作者が話さるゝ程、有名なのだ。

秋の屋＝毘首羯磨は神でなくて人であらう。今で言ふところの工藝家である。

東　魚＝佛樣の有難きより、これは誰々の作と先きに云ふので、即ち毘首羯磨の作るところと云ふ事を、第一に見る者も心にとめると云ふ意である。毘首羯磨は天竺の有名なる佛像彫刻家。と俳諧辭典にあり。俚言集覽には（正理論）毘首羯磨、此云種々工業、西土工巧者多祭此天、とあ

り佛工の名人に此の名あるは、此天の名に象れるなりとあつて、個人的でもあり又一般的の稱らしく考へられる。處、恰も飛驒の工といふやうなものと考へる

省　二＝佛教大辭典に據ると「毘首羯磨、毗寫羯磨、新に毘濕縛羯磨と云ふ。帝釋の臣にして種々の工巧者を化作し、又、建築を司る天神なり。種々工業と譯す。依て西土の工巧者は此天を祭ると云ふ」。智度論其他が引用されてある。傳說には毗首羯磨化爲人、來爲王造像とか、又化身鴿などの事もある。川柳の寺なる龍寶寺の本像が、毘首羯磨作と傳へらる。

(197)　かはやきの煙の中に善の綱

省　二＝「善の綱」とは、(一)葬儀の柩をひく綱。(二)臨終に際し佛の御手にかけた五色の綱を持てば極樂往生が出來る。(三)開帳の時參詣人に曳かせる綱の謂で、其主旨は善所に導かるゝためである。此句は(三)に相當する。蒲燒の煙、の中であるのは、皮肉にも思はれるが、以て雜閙の樣は察知し得る。

秋の屋＝開帳場の光景を咏んだ句で、善の綱の引いて有る所に、蒲燒の煙が立昇るとは、面白い見附けどころだと思ふ。

東　魚＝蒲燒の火あぶりを、地獄とみるとチトいや味になるが、さうした苦樂の對照の心持が、ひそかにありはすると思ふ。

(198)　三味せんは乞食の膝へ作り付け

省　二＝ぽつん〳〵と彈ひて、憐みを乞ふのだから、座して居る膝へ作付けにしてある。（橋の袂の盲乞食などにみる。）

秋の屋＝平凡のやうではあるが、捨て難い句である。

東　魚＝看板斗りに、膝へ三味線を、たゞ構えてゐるのではないか。彈かないでゐる方が一層哀れが深く思はれる

(199)　角力取髭人參に助けられ

省　二＝本當の人參をもち出さずに、髭人參とした處があの大圖体の角力取に對して、句の興趣をなして居る。現漢藥相場で一斤二圓三十錢位なもの、私は煎じて飲み又入浴用にもして居る。

秋の屋＝髭人參といふ名からして、滑稽に感じられるが本名は尾人參といふので、朝鮮人參とは別種である。

東　魚＝私が在鮮中總督府の友人の世話で、髭人參を少々手に入れた事がある。きざみするめの樣で、鼈甲色をしてゐた。この句角力取だけに、如何にも可笑味がある。

省　二＝和漢三才圖會にも、俗似爲大人參之髭細根者非也とあり、又、其功勝於大人參之浮虛者とあるが、錢湯で人參湯の看板を掲げるものは、この髭を用ひて居る。朝鮮には產出する。高二、三寸、葉が人參に似た蔓草で蔓が莖から出て地につき根をはやす。私の實驗では大した効能も顯はさぬ。平素頑健な角力取だから、髭で助かつたのであふう。『丸山で髭人參を花に出し』（古川柳）

川柳塔

路郎選

大阪　高橋かほる

桃割れと島田が殖へる十二月

十二月同じ所に居ると云ひ

リヤカーと自轉車どつちも腹を立て

大阪　橋本　綠雨

山茶花は往來の人も見てくれず

しんがりに無錢飲食殘るなり

○

大阪　朝田　新水

悋氣の胸に栗がはぜてる

死ねと敎へた子の無事を見るも母

世帶の味のはやほどき物

靴のかゞとの理想にや生き

兵庫縣　水谷　鮎美

白湯をのむ息子戀愛至上主義

金のあることを話して湯にひたり

短靴へ砂がはいつた御用聞き

名古屋　吉田　水車

三等車風呂につかつたかたちなり

バスガール今日は娘と言ふ姿
植木店早くも春の花になり

大阪　村松夢裡

金がない顔ですませぬ世辭をきく
肝心な話になつて客が殖へ
サンプルへ食傷の顔いと貧し

大阪　松下小柳子

かす汁へ父の姿を淋しく見
冬の寺子守と鳩と仲がよく

大阪府　妹尾變人

お茶屋にもやつぱり來てる十二月
秋空のかなたいくさがあらうとは
藁ぐらい殘りますわい小作人
ボーナスを貰うた君と僕の足
貧しさの思ひがけない嘘となり

大阪　後藤青兒

滿洲も金は落ちてぬ意見する
同姓の戰死にハットする日なり
晝ともす電燈を持ち世をかこち
お隣のピアノ軍歌になつて來た

大阪府　宮岡白峰

文學を笑ひ女給の卷煙草
たそがれの道頓堀に似る君よ
謹みて國旗へサインして戻り

大阪　西いわを

僕等にも軍歌を唄ふ子が二人
退職の時は意見を聞いてくれ
臨月の身で誓文の中を撰り

大阪　加藤ライト

お隣りと壁のうすさの話し聲
仲のよさ車掌注意も出來ぬなり
仕事着と違うぞ言葉愼まん

大阪　中西おさむ

馬の脚して幾年の舞臺なる
結ひ上げて襟寒々と十二月
バスガール正月といふ紅をさし

廣島　鳥生古弗

部長留守改革論に果もなし
子澤山顏をしかめたボーイです
机上サッパリ灰皿とスタンド

○

金澤　安川久留美

冬の日の疊に鋏置いた音
たけ高く靴長くして辻の冬
白骨を迎へし親父酒を斷ち
疊替した夜亭主が一人寢る
物言はぬ叔父サボテンに似た個性

兵庫縣　長崎柳秀

もうやめるゴルフ蝙蝠飛び交し
眉のない顏が浮いてる樂屋風呂
鏡かけ嫁の好みをあかず見る
馬鹿云へと云へど嬉しさかくされず
警察をいまだにうらむ人違ひ
墓詣時雨れて居るもありがたし

廣島　濱田久米雄

初春の髪滿ち足りた十八九
溜息の太さも十二月を半ば
背景は祖國日本刀を提げ

愛媛縣　今川椋影

赤襷軍歌の如く出かけたり
散髪を終れば雨が降つてゐる
だが然し精神的の援助です

★ 同情週間 師走川柳大會

川柳人協會では既報の如く大阪朝日新聞社會事業團の後援の下に十二月三日午後六時から大阪朝日新聞社三階大廣間に於て師走川柳大會を開催した。開催の目的が歳末同情週間への義金として會費總額の寄贈にあつたので時宜に適した句會として京阪神川柳人多數の賛同を賜はり別欄實況記事の如く頗ぶる盛會を極め、會費金六拾參圓を大阪朝日新聞社會事業團に托して歳末に特に惠ぐまれざる人々へ贈る事にした。

（句報次號掲載）

なほ當夜、設備萬端不行届であつたにも拘はらず、京阪神川柳人が一堂に集り頗ぶる和やかな會として終始せしめられたことを大會委員一同は感激してゐる。左に出席者の御芳名並びに大會委員を掲げて記念とする。

出席者 艸樂・ゆきひら・綠雨・美奈子・青兒・潮花・水客・南濃路・哲也・柳笑・紫香・聞路・福道・かほる・宣介・舍愚・白峯・一生・秀太・喜山・小柳子・達雄・白砂・靜路・謙南坊・よし江・光路・斗風・秀峯・柳千・京二・榮・登代路・稔幸・柳次・吾馬・塊人・蓮史・笑濤・義孝・信二郎・呑水・鮎美・風葉・澄風・文樂・水紫・小松園・雨亭・長人・美根子・由布・醉狂・素石・子樂・一門・大研子・城兒・東魚・方水・睿坊・漫歩・愁水・百雷・木念仁・秋生・實圓・五扇子・稔・葉・村句茂・歌仙・千蝶・樂天子・達・一歩・正光・五黄子・三代吉・石艸・麥魚・黄波・碩兒・寄與史・喜由・芳一・里十九・翠陽・喜彦・夕鐘・琴舟・溪花坊・百樹・與三郎・紅白・青一路・柳秀・聾一・貢・さしみ・星花・沐天・卜居・文久・雀踊子・艸成・友帆・東洋鬼・すみ・みゑ子・久彦・丹路・夢裡・閑古鳥・葭乃信・みきを・武・秀次・アキラ・ライト・亞鈍・夜王・亮雄・松太樓・最美地・變人・万よし・青浦・不角・一狂・破竹・紋太・松徑・彩古・美知夫・水染・菊人・兎踊子・兆山・アート・鵜峯・東雀・いわを・路郎（順不同敬稱略）

大會委員 路郎・塊人・東魚・福道・紋太・綠雨・艸樂・百雷・丹路・水客・潮花・里十九・葭乃・新水・夕鐘・ライト・柳秀・青一路・夢裡・かほる・紫香・青兒・八歩・變人・鮎美・白峯・柳次・悟郎・豆秋・みきを・いわを・みつる・亞鈍・おさむ・南濃路・万よし・沒食子・喜由・小柳子・（順不同・敬稱略）

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳人の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催

▼川・雜・名古屋支部新年句會（名古屋）は大阪より路郎主幹等を迎へ一月五日午後三時鐵砲町の長圓寺に開催される由。▼川・雜・岡町支部（大阪）では一月十五日に路郎主幹等を迎へて、その創立句會を開催する由▼路郎川柳講座（大阪）松坂屋百貨店の松坂倶樂部の一月講座は十六日午後一時三十日午後一時に開催される由。一般の來會歡迎。▼有恒川柳會（大阪）十二月七日午後六時半より有恒倶樂部に於て例會開催。▼路

★柳人素描

（一五）福田山雨樓君

山雨樓、福田義達（よしたつ）君は鐵道官吏で、鐵の如き意思と頑健なる體軀の持主だ。孝養、謙讓、親切の美德を持合はせ、加ふるに業務に精勵恪勤だ。ソレでゐて隱し藝としてのい、咽喉も持つてゐる。けだしサラリーマンとしての好典型だ。君が大阪淺町から拔擢されて本省入りをしたのも故なきではない。

君が、川柳に手を染めたのは大正十四年の春だそうだが　滴水と號して多年俳句に親しんでゐただけに、その作風はガッチリしてゐる。

茶碗の丸さたのしみに滿つ
赤松のみどりが僕を生んだ村

君は明治三十一年十月一日、岡山縣赤磐郡潟瀨村屑脊に生れた。今は横濱市保土ケ谷に住し、二男一女があり、職を丸の内の鐵道省に奉じてゐる。趣味は圍碁、

耶川柳講座（大阪）十二月五日午後六時より松坂屋百貨店松坂倶樂部に於て開催。▼阪大川柳會では長崎博士在職三十週年の記念句會を十一月二十五日阪大惠濟會館で開催され、なほ十二月十五日には忘年句會として頭を捻つた川柳福引などで賑々しく散會した。▼川・雜・廣島支部忘年句會は十二月九日廣島鐵道局倶樂部で開かれ、本社宛に支部同人達の寄せ書が屆いた。▼川柳國十一月句會は北野衛生組合事務所階上で同月十日夕刻より開かれた。▼廣島支部では十一月二十二日川柳雜誌社不朽洞會員福田山雨樓君の歡迎句會開催した。

消息

▼阿部佐保蘭君（東京）は一意專心S・H・Kのために奮鬪努力してゐられる▼鈴木一潮君（滋賀縣）は十月五日から十一月十五日まで神經衰弱で京大へ入院してゐられたが、もう全快されたらしい。▼松本文太君（石川縣）は上海野戰病院で療養中であつたが最近は石川縣陸軍宿舍たまや舘で療養されてゐる。再び奉公の日を待機してゐられる熱誠が君の通信にあふれてゐる。▼福田山雨樓君（横濱）は十一月二十一日阿蘇山へ登られた。▼大阪媛柳川柳社森雞牛子君（大阪）は同情週間師走川柳大會へぜひ參會するとのお便りであつたが遂に御出席がなかつた最近健康を害してゐられるさうであるが、御自愛を祈る。▼鳥生古弗君（廣島）は藝備銀行大手町支店へ二十三日から轉勤された▼大島濤明君（大連）は雪と氷の美冬の滿洲へ旅行された。▼戸倉晋天君（兵庫縣）は事業のため隔月に滿洲へ旅行される事となつた。商實も繁昌し、近作欄へも足しげく通ふて頂きたい。▼橋本綠雨君（大阪）は八日市飛行場を見物され、永源寺から「永源寺紅葉で包む姿なり」の句をよこされた。▼石曾根民郎君（松本）から松本印刷聯盟とした宣傳の葉書が屆いた。「實務には役にたたざる歌人と」は句を通しての君である君が作製したといふその文案を見れば、商實はみちによつてかしこしの感深くせまる▼同情週間師走川柳大會の前日の朝天保山渡船轉覆の慘事があつた。乘客の大部分は岡町支部の關係者多く、潮花、呑水、の諸君等は徹宵の有樣であつた。潮花君から大會の招待券を貰ひ、出席を樂しんでゐられたと云ふ田中氏が此災厄に遭遇されたと聞いて限りなき哀愁を覺えた。▼中西おさむ君（大阪）は勤務先の社長さんが亡くなられたので其お通夜で大會へは出席されなかつた。▼川協正會員の大西洋君（大阪）は一月十日、第四聯隊へ入營される事となつた。君國のために盡す覺悟との健氣なるお便りがあつた。▼辻井京二君（京都）は十二月十四日神戸發臺灣へ出張された。大和丸からのお便りに「紙テープも一つふえたドラの音」▼山田有町君（愛知縣）は同情週間師走川柳大會へ地方からの出句者中、唯一人の

謠曲、庭球。川柳關係では川柳雜誌社東京支社長、川柳雜誌社不朽洞會員、川柳人協會理事。

（一六）須崎豆秋君

豆秋君は賑やかなやうで淋しい男である。友達に鰒を食はされ、變にあたたかくなり、少しく痺れを感じ、今夜の十二時までが危ぶないんだと聞かされ、急いで別れを告げに不朽洞を訪れたといふ瓢逸さが、彼の句の到るところに迸出してゐる

彼は路郎門の一茶で川柳の門を潜つたのは昭和三年の秋ごろだつたあゝ大空生れては死に生れては死に

秋風の中で乞食に拜まれる

ピヨイ〳〵とうなぎを大中小に別けが、その作風で彼の觀點の置きどころを知ることが出來やう。その大半は瓢逸で、あり、奇警である。本名は清次、明治二十五年九月八日香川縣坂出町に產まれた今は大阪住吉區旭町に住し職業は會社員趣味は散歩に音樂。川柳雜誌社天王寺支部幹事、川柳雜誌社不朽洞會員、川柳人協會評議員。

入賞者としての榮を擔はれた。▼戰後の北支へ歸られた岩崎柳路君夫妻（張家口）は商賣の方が目のまわる程の好景氣であるとの報に接した。考へただけでも溜飲がさがる話である。柳路君夫妻へ遙かに祝杯をあぐ▼大島濤明君（大連）は十二月九日「川柳眼で見た大連の異色」と云ふ演題で放送をされた。▼淺瀨公君（大阪）は最近鶴町支部句會へ出席してゐられたが來春からは中見光路君と塗膏支部の句會を再び盛んにすると大いに意氣込むでゐられる。

慶弔

▼十一月二十七日、高鷲亜鈍君の令閨には次女純子さんを儲けられました。お慶び申上げます。▼松江支部同人玉城莞路君は、十一月三十日長男を擧げられ、雅司と名命された。▼柳樽式江戸情緒の句を作つてゐた駒井美の作（憲）君が十二月八日に豊中市で永眠された。葬儀には東魚、線雨などの川柳家の顔もあつたが、同君は昭和二年六月に川柳雜誌社の同人を辭してから、いつとはなしに柳界を遠ざかり狩獵や得意の花卉の世界に生きてゐた。明治二十三年十二月十三日生れで行年四十八歳。哀悼。▼川・雜籟川支部、元川柳雜社松江支部幹事をされてゐた奥田雪緒君は十二月五日、一行四名にて伯耆大山より處女雪を征破し、下山の途中猛吹雪に遭難他界された。不慮の御災難を衷心お悼み申上げる。元川柳雜誌社籟川支部同人、澄田羅門君が名譽の戰死をされた。謹んで悼む。

轉居

▼石手河鹿君は高松市百間町ライオンカンへ▼酒見洛水君は大阪市北區伊勢町二九山田樣方へ▼飯尾寄與史君は尼崎市西長洲井ノ口五十一番地板田松市郎樣方へ▼奥富天作君は廣島市段原新町第三〇七番地へ

改號

榎田　珍竹林は竹林

正誤

前號（武玉川）一七頁下段一七行目の「枕がいつも」は「枕がいくつも」の誤。

御禮

師走川柳大會開催費として左記の通り過分の御寄贈に預り有難く厚く御禮申上げます

川柳人協會

▼金一圓福田山雨樓▼金一圓明石柳次▼金二圓橋本綠雨▼金二十圓山本丹路▼金五圓永田里十九▼金二圓姫田夕鐘▼金二圓須崎豆秋▼金二圓村松夢裡▼金二圓後藤青兒金二圓西いわを▼金一圓妹尾變人▼金二圓梅田支部▼金一圓水谷鮎美▼金四圓五十錢庄萬よし▼金十圓米本貫志子▼金一圓朝田新水▼金一圓市場沒食子▼金一圓野本呑水▼金一圓黑川紫香▼金一圓丸尾潮花▼金三圓岡町支部▼金五圓大坂形水▼金三圓西田艸樂▼金二圓鶴町支部▼金二圓加藤ライト▼金一圓松下小柳子▼金一圓宮岡白峯▼金三圓大鐵支部▼金一圓正本水客▼金一圓森東魚▼案内印刷費桃谷順天館▼句箋田中風葉▼齒磨百五十袋中山太陽堂▼金二十圓麻生路郎

（順不同敬稱略）

一路集

募集句

工事

森東魚選

軌道工事電車は少しづゝ動き　松大樓
工事場をぬけて女は唄にされ　美津枝
水道の工事庭木の根をさらし　隼人
旅費だけが殘つて工事小屋を出る　浮草
杭打は聲の良いのにしこなされ　藤一
工事場へ女將は何か云ひに立ち　寄與史
反感も知らず工事の杭を打ち　堯子
出征へ鶴嘴を振る手を休め　曉香
工事場を雜草にする鐵飢饉　無煙
トロおして戻る日暮の日は赤い　春坊
工事場へさびしい秋の日があたり　菊路
工事場の元は畑に風が鳴り　斗風
工事場のたき火を圍む無性髭　美知夫
マダム來て工事變更だらけなり　沐天
工事場の隅まで見える稻光り　新・水
工事場の晉北風の吹きつける　同

工事場の隅に朝顏枯れたまゝ　風葉
長雨が晴れて工事の木のしめり　同
霧の夜工事はまだ〳〵續くらし　陽出男
工事場へ休めと畫の笛があり　同
看板の裏で工事は進んで居　南濃路
工事場に又寄つて來た子守連れ　同
工事場へ來る辨當はトロに乘り　市他樓
近頃を休む工事場虫の聲　同
漫然として工事場へ足を留め　岩石
工事場の畫へ號外束で來る　同
眞夜中を軌條切換え灯が明い　呑水
ミキサーの伴奏ビルが伸びてゆき　同
工事場の辨當美味し空靑し　葉光
鐵骨の工事へ明日を夕燒ける　同
板塀の際間工事が洩れて見え　紫香
工事場の畫型枠の上に寢る　同

雀餌を拾ひ工事場休みなり　葉留路
食堂の窓工事場を見下ろして　同
杭を打つ響商談まとまらず　ライト
工事場の響添乳へ腹を立て　同
增築の工事儲けた音をさせ　春巢
工事場へ軍務公用呼びに來る　同
しよざいなさ土木工事も見てもどり　潮花
工事場のクレン小さな旗を付け　同
設計に無い屋上の稻荷さん　豆秋
工事代豫算を見せて値切られる　同
工事へ何所の犬やら遊びに來　同
工事場の秋はくしやみが一つ出る　水客
落成と見えて工事場幕を張り　同
秋深く護岸工事の水の色　同
工事場のカンテラへ降る秋雨　曉童
工事場の視察を終へた靴をふき　同
此處だつたあとを殘して瓦斯工事　同
大工事落成蔭に秘話があり　曉明
有名なトンネルになる難工事　同
豫定とは工事後れるものにおれ　同
ステッキの先は工事の小言なり　溪月
工事場の隅で無心な子等積木　同

完成も近い工事へ妻も連れ　同
水溜工事場へ月が冴えてゐる　鮎美
ネオンの灯工事を急ぐ灯もともり　同
假橋を架けて工事の假事務所　同
工事場のクレーンへ赤とんぼ流れ　同

支店

支店とは名ばかり一人執務する　曉明
滿洲も支店勤めで見て戻り　松太樓
內達に支店の風習きいて居り　同
もうくびも近い支店長になり　溪月
甘んじて支店の椅子に待機する　堯子
並木路支店の文字がよく目立ち　春坊
愛婿を抜擢させる支店出來　葉光
本店の應援がある開店日　美知夫
廣告へ支店の出來た事も添へ　潮花
ビルディング支店々々の札だらけ　沐天
來年は支店も出して見る氣持　美津枝
もつぱらにマダム支店の方に居り　水客
スローガンも同じ支店がよくはやり　陽出男

工事場と假營業所隣り合ひ　文庫
半島の聲高らかにトロを押す　同
やゝ猿に近く鐵骨から降りる　同
工事場へ伸びて一枝惜しがられ　同
農村へ攻め入る如く土を埋め　同

村松夢裡選

支店とは名のみビルの隅の隅　葉留路
開設の正座にほてる支店長　無煙
ロンドンの支店見て來たやうに云ひ　春巢
妾腹に產れ支店の名を貰ひ　ライト
美しい腕で支店を切り廻し　潮花
本店と並ぶ支店の現代味　同
二十年勤め支店の名を貰ひ　文庫
支店では次男の印で用が足り　同
會議には支店の例が持出され　晤栽
成績は支店の如何と訓辭され　同
印象の强さ支店長の太い首　風葉
支店から電話のかかる下げ相場　同
支店長髯を捻つて悠なし　菊路

社長今日支店へ廻る用があり　同
理髮屋の支店を持つた立身傳　斗風
宣傳が下手だと支店叱られる　同
四時ぎりといふ支店での面會日　新水
出そびれた休み支店での欠伸　同
支店から出迎のある驛に着き　鮎美
支店擴張ひろげられた世界地圖　同
アドバルン昇げて支店の宣傳部　同

（佳）

增築の支店の窓のあかるき灯　斗風
支店出すプランのまゝに年の暮　南濃路
本店に負けぬ支店の意氣があり　春坊

（軸）

體驗は支店の立場よく判り

★社告

左記三君が川柳雜誌社不朽洞會員に推薦した

正本水客君
黑川紫香君
丸尾潮花君

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

本社句會

十一月六日　於誓得寺

兼題　娘ごゝろ（路郎選）船（艸樂選）

席題　伜（互選）沿線（青兒選）
假橋（變人選）指先（綠雨選）
太刀魚（東魚選）

男ぶりまでは娘のよう聞かず　艸樂
嫁ぐ日の近づき内氣増すばかり　樂天子
泣ぬれた娘ごゝろへ赤トンボ　斗風
伯母さんとならぶも娘心なり　かほる
うれしさをすれてみせるも娘なり　里十九
娘ごゝろ吉屋信子を儲けさせ　形水
母親と居ればターキーしほらしゝ　愛二
ひき出しへ娘心の鍵をかけ　變人
もう死があるばかり娘強う居る　同
押の強さ娘ごゝろと思はれず　夕鐘
あんなてれくさいことなかつたわ　同
と語り出し　同
（人）ハンドバッグ持たす異性と心得る　葭乃
（地）十字架へ娘ごゝろの澄んでゐる　斗風
（天）月曜に逢へるに手紙などを書き　東魚
（軸）娘ごゝろ相談をして休むなり　路郎
（軸）寶塚を志したも十五六　同

船世帶風流じやない月をほめ　謙南坊
船べりへ入日の映えて漁師の子　亞鈍
ドラが鳴るテーブも風に鳴る別れ　葭乃
船底へ喘ぐ軍馬も國のため　青兒
橋杭へくゝつて船は飯にする　稔幸
御用船〇〇港をやみに出る　南天
裏と裏道頓堀を船でみる　里十九
かき船であたらチャンスを逃したり　夕鐘
遊覽船こしやくな波を立てゝ過ぎ　潮花
船長の最後を飾る難破船　五扇子
船々々港のせまさ感じて居　綠雨
港の灯眞近く船はゆれてゐる　斗風
船旅はよし秋晴れの瀬戸をゆく　同
船の出たとこへ追手は息を切り　變人
船に居る噂行方の知れぬ子よ　同
阿波通ひ突堤へ來た下駄の音　鮎美
親方を信じて阿波へ着いた船　同
（人）船出の感傷を意見する銅鑼　葉光
（地）船世帶小芋が煮えるビルの下　鮎美
（天）酒場から淋しく船へよろめいて　變人
春中から伜短册出してみせ　かほる
金のある事を伜は當てにする　ライト
伜らしい手紙と父は笑ろただけ　斗風
自慢するところで伜入つて來　紫香
出世して歸る伜の肩の巾　稔幸
いつの間か伜酒が強くなり　艸樂
伜から催促されて釣錢をとり　鮎美
伜と伜ニュース映畫をみに出かけ　同
沿線の名所定期は知らぬなり　紫香
沿線を賑はす梅となりかける　葭乃

同じ沿線かと電車で笑ひ合ひ　東魚
沿線に電話を引いて妾おき　斗風
沿線の影が寫つたすり硝子　かほる
沿線は御召列車を待つ赤子　五扇子
阪急南海大阪人を色分ける　亞鈍
沿線の秋と春とがもうけて居　南天
沿線に粋な名前の驛の　里十九
追撃の列車にみえる我威力　樂天子
沿線の空地うなづく基礎工事　鮎美
沿線に住んで御無沙汰がちになり　ライト
沿線へ都會の空氣捨てに來る　松太郎
沿線へ神社のあるを書きそへる　同
召集令此の沿線も來たらしい　稔幸
淀川を過ぎて空氣がすんで來る　同
車窓から見つけた今の我が住居　變人
沿線をほめて是非にと誘ふて來　同
結ばれた姿沿線の景になり　同
今に耳くなると假橋ゆれて行き　東魚
假橋をわたり恩師を案内する　鮎美
薄暗い灯に假橋を渡らされ　紫香
假橋で黴匂はして行違ひ　夕鐘
彼女もう假橋を見倦いたり　里十九
假橋でふと行末を考へる　同
假橋で女給無心の念を押し　ライト
假橋を避けて娘は歸つて來　同
假橋で目高をすくふ子等を見る　斗風
假橋で風呂の歸りを話しこみ　同
假橋の秋へ如才ない餅屋　松太郎
假橋へ月の丸さを褒めに來る　同
自轉車を降りて假橋渡つて來　同

金を出す父の指先ふるへてゐ　斗風
指先で強く押した支那の地圖　青兒
豆一つはめぬ指のもどかしさ　愛二
指先に敎へて貰ふ白き壁　ライト
指先をみつめ生活ふりかへり　松太郎
指先をよごしたまんま今日も暮れ　夕鐘
友情の指先へマッチ燃えつくし　變人
太刀魚の小骨そのまゝ胃にのまれ　五扇子
太刀魚を買ふにとなりと話し合ひ　鶴峯
太刀魚は男が燒くとくづれかけ　變人
隣でも太刀魚の煙出してゐる　愛二
太刀魚の片身へ骨の跡が付き　ライト
太刀魚の長方形へ箸を入れ　亞鈍
君のとこもかと太刀魚燒けるなり　東魚

里十九
秋の陽が妓の横顔へ線を引き　翠陽
横顔へ嘲ける色が見へてゐる　秀峰
横顔を見せてポストの影にゐる　かほる
横顔のさびしい妓酒がすき　斗風
横顔が父に似てゐて親まれ　靜波
横顔の思ひ出せない戎橋　秀峰
深刻な横顔不遇な提琴家　卜居
失戀の横顔雨にぬれてゐる　斗風
横顔になりそばんを下に置き　かほる
横顔の君衰へず猫を抱く　鮎美
臥そべつてみる横顔の第三者　同
情婦の艷の横顔にある今宵　同
横顔は椿の花にふれてゐる　同

炭籠を二人がうばひ合ふ若さ　斗風

川雜 梅田支部句會（大阪）

二句集賞（西瓜・ホテル・信友）　水谷鮎美報

信友の辯なつかしい久しぶり　由布
ホテルから出て來た男の黑眼鏡　遊歩
西瓜を切つて親の裸に子の裸　鮎美

前進座觀賞句會（九月二十四日）

人情紙風船
あひくちと金を嗤つた新三の眼　鮎美
惡黨のまこゝろのある朝となり　同

かほる賞（雨蛙・陽氣な妓・朝顔）

（人）こしらへたように泳いだ雨蛙　鮎美
（地）相談の灯へ雨蛙なきつゞけ　同
（天）待つてゐる素足へ飛んだ雨蛙　冬扇
（人）一現に望まれてきた陽氣な妓　靜波

川雜 梅田支部 やなぎ句會

十一月十九日夜　於尼崎かき金　水谷鮎美報

炭籠・横顔

炭籠へ餅あみのせて客へたち　遊歩
寒いこと母は炭籠さげて來る　雨聲
炭籠をさげたダンサー露地をゆく　翠陽
炭籠をかやして母に叱られる　夕人
炭籠を持つて勝手へ聲をかけ　斗風
ヂヤンケンに負けて炭籠持つて來る　靜波
ほんまにそうだつせ炭籠を引きよせる　卜居
炭籠の炭をはさんで意見めき　鮎美
炭ついでゐる間炭籠親しまれ　同
炭籠もおいて樂しく父とのみ　秀峰
炭籠をさげて落付くとこへ座し　鮎美

(地)どこへやら櫛をおとした陽氣な妓遊歩
(天)渡し舟さきへのるのが陽氣な妓　同　静波
(人)朝顔へ女房の用が増へてゆき　静波
(地)朝顔へ泣きやます子をつれてくる遊歩
(天)風鈴が鳴り朝顔に水をやり　鮎美

川雑

鶴町支部句會（大阪）

十一月二十一日　於加藤ライト居　加藤ライト報

夜、値上げ、火、ズボン、弱味　ライト
眞暗な夜道へ女寄り添ひて　最美地
縄張りのもつれへ更ける夜店の灯　小柳子
病む母へ氷割つてる午前二時　よしみ
改心のフト負けそうな夜の色　松太樓
夜遊びの誰も怒つてくれぬなり　同
鏡臺へ思案にあまる夜もありて　ライト
子を抱いて出た夜へ星がよく光り　變人
嘘の夜が明けて白粉はげかゝり　同
値上りが淋しく膳にひゞく宵　よしみ
協定の値上げへ弱く買うてゐる　小柳子
値上げ値上げ商賣人もこぼしてゐ　變人
犬の子も居るのに米の値が上り　よしみ
ストーブへ故郷のゐろり火を思ひ　白峯
防火班矢張り若いなと思ひ　ライト
煙草の火借つてバットやなと思ひ　變人
火を借りて心の中を見ぬかれた　
みかんの皮はき〳〵女中火がほしい　小柳子
風呂の火を焚かされてゐるめでたい日　變人
牛ズボンリュックサックが重たそうライト
折目あるズボンで嘘を云ひに來る　最美地
それとなく女はズボンたゝむなり　よしみ
秋空へ欠伸してゐる牛ズボン　白峯
約束の明日へズボンを敷いて寢る　最美地
叱られてズボンの膝へ目をなげる　變人
よい事があるぞズボンに手を入れる　同
職業の弱味を知つた朝を行く　白峯
迷心の口に引かれてゐる弱味　同
れちゃ〳〵と弱味へ金を借りに來る　よしみ
弱點を指摘されまい猪口をさし　最美地
惚れてゐる弱味へ妓あつかまし　ライト

川雑

廣島支部句會（廣島）

十一月五日　於倶樂部　澤井香月報

貯金、車掌、約束、誘惑、全快、櫛
何時入れたまゝか通帳見當らず　葉留路
貯金帳三千圓で趣味をかへ　香月
貯金箱まづ一錢を入れてやり　星州
貯金などしてはゐないと云ふ若さ　葉留路
五十錢殘して貯金それつきり　至宏
病床で貯金の殘りなど思ひ　久米雄
その當座だけ入れられる貯金壺　寧男
退官の貯金で建てる設計圖　久米雄
更生を待つ囚人の貯金帳　古弗
貯金壺子供時々振つて見る　寧男
大望を抱く給仕の貯金帳　香月
恩給で暮す氣貯金を考へず　九天
乘越しの切符へ車掌釣がなし　古弗
パスガールの名所を背に聲を張り　つや子
巧妙に拍子もつけて切符切り　香月
車掌君今日は私服で腰を据ゑ　一雄
酔漢へ車掌は怒つても見たり　久米雄
終列車車掌欠伸を捨てゝ乘り　星州
車掌ふと昔馴染を見つけたり　久米雄
氣に入らぬ車掌ドアーを強くしめ　寧男
檢札へ老婆の耳が遠すぎる　葉留路
稻の波車掌は故郷のことにふれ　九天
お饅頭でいゝ約束の手が温し　同
約束は約束だがと出し渋り　寧男
約束を違へた詫が呆氣なし　久米雄
約束が破られてゐる電話口　星州
約束をした日ラジオは雨を告げ　葉留路
約束を忘れる人は忘れられ　松風
約束を守れば肩をぽんと打ち　富子
夕燒けへゲンマンをして子等歸り　久米雄
先約があると惡友斷られ　星州
約束を違へ氣まずく宵寢する　久米雄
約束の襟がポケツで温たまり　九天
約束の菓子を待たずに子は眠り　久米雄
誘惑をするなとにつこりついて行き　至宏
誘惑に勝つて淋しい氣にもなり　星州
誘惑を待つてますよと散歩する　一雄
誘惑へ弱いこゝろを知る日なり　久米雄
惡友があつてお酒の量がふえ　星州
赤い灯をのがれ我が家の灯が明し　九天
誘惑をふり切る眉が太いなり　同
内氣だと誘惑の手に乘つてゐる　香月
誘惑を承知の上で呼び出され　寧男
誘惑に勝つてその日の夢となり　一雄
誘惑へ突飛な嘘を考へる　久米雄

誘惑をするのか女隙を見せ　葉留路
誘惑へ女ごゝろの嘘が出る　久米雄
全快の目に生きゝと街は見え　至宏
全快のうれしい便り柿も熟れ　九天
うはごとを快氣祝にきかされる　寧男
全快に一家が揃ふ飯の味　久米雄
全快の窓へ明るく差す朝日　葉留路
全快の顔が話題の的となり　一雄
眞新の下駄退院によく晴れる　九天
全快の友を見舞つて酔はされる　久米雄
櫛今宵不眞寢の手から投げられる　同
洗ひ髪ひるまで櫛を使ひ分け　富子
つげ櫛の世帶の色に光る艶　古弗
延ばしたて夜店で櫛も買つて來る　至宏
登校へ母は一櫛入れてやり　葉留路
國境今越す馬の鞍をしめ　同
傳令について流れる白い雲　同

雜川　名古屋支部句會（名古屋）

十一月一日　於長圓寺　吉田水車報

紅葉、昔もの、橋、やりくり
針、障碍

紅葉の小路を走るホネムーン　かづし
ポスターは紅葉ストーブ欲しい驛　文芳
燒鳥で一本炯ける紅葉茶屋　可香
夕陽いま紅葉の山へどつと暮れ　鮮山
吊橋の向ふも紅葉見頃なり　琴線
辨當を瀧迄のばす紅葉狩り　素天
嵐山へ來たハイカーの染まりさう　琴線
賣る庭の紅葉に見惚れてゐる人夫　三八朗
昔もの可成りの道を徒歩で來る　琴線
古錢などならべ指輪を賣つてゐる　正穂
家出して昔堅氣が判つて來　文芳
事勿れ主義を昔の者にする　琴線
虫干に昔はやつた被布の艶　可香
事ごとに暦を昔者は見る　琴線
焦せり氣の父祖父傳來の物が減り　文芳
軍國の秋孫六の親ゆづり　三八朗
棧橋に立つて希望の有る男　同
土橋まで來て引返へす蜻蛉釣り　鮮山
蠣船の灯が搖れてゐる橋の風　可香
ニュース館敵前架橋に息をのみ　正穂
童謠の舞臺明るい虹の橋　鮮山
宇治橋へ來てトランクを持ち換へる　琴線
遠足のこしで亂れる丸木橋　翠穂
やりくりをしてると見えぬ門構へ　素天
やりくりの工面がつかず宵寢する　翠穂
借るあてもなくやりくりに灯が點り　鮮山
やりくりでどうにか出來た子の晴れ衣　翠穂
やりくりになれた勝手の通ひ帳　可香
昇給にもれてやりくりまだ續き　正穂
やりくりの生活へ妻の面やつれ　翠穂
やりくりはつかず長男未だ小さし　かづし
やりくりに馴れて上手な嘘も言ひ　可香
やりくりの内證で借りる子の貯金　琴線
戰地から便りが着いた針坊主　正穂
注射針未だ人生に未練あり　三八朗
お針の手ふつとお腹の兒をおもひ　水車
或時の番は針山ほども差し　同
寢せつけた子供が見える針仕事　かづし
注射針代診さんの手が白い　三八朗
寅歳が千人針の數で知れ　文芳
遮斷機へ出勤時間せまるなり　正穂
三勇士幾つも出した支那事變　素天
鐵條網へタンク怒つたやうに行き　三八朗
突擊の目に山もなし川もなし　鮮山
空襲に一度逢ひ度い探照燈　文芳
クリークを越えて皇軍息を入れ　可香
トーチカの肉彈戰にさゝれまじ　三八朗
封塞艦千鳥が餌を捨ひに來　文芳
月光の下にクリーク延びてゐる　可香
トーチカを問題にせぬ日本軍　素天
鐵條網張つて安心してる支那　翠穂

川雜

大鐵局支部句會（大阪）

十一月四日　於大鐵局倶樂部

正本水客部

祭日、ニュース、覗く、紅葉

スリが居そうに祭日の人の群　喜山
非常時の祭日遊びになど行けず　秋生
ラヂオ体操祭日の陽はあかい　紫香
祭日を一人歩けば土埃り　水客
祭日の雨道幟堀のはれとなり　一生
祭日、日章旗はいゝなと思ひ　某人
自轉車で聞き乍らくるいゝニュース　水客
勝つてゐるニュースも一度繰返し　某人
持ちよつたニュースへ地圖は擴げられ　紫香
出動へニュース半分ほど殘し　喜山
みんなもう知つてる通り辭令出る　某人
弟が出てくるニュースへみんな行く　喜山
呆氣なくニュース漫畫と變つて來　紫香
老夫婦ニュース映畫を拜んでる　萬的
夫婦喧嘩覗いた人を知つてゐる　某人
關東煮屋覗いて眼鏡くもらされ　一生
叩き賣り覗いた顏へ安く貧け　知聞
寒々と廣間を覗くひとり旅　水客
ちよいと一目覗けばすぐに怪まれ　某人
あばら家の暮し覗いたなさひがみ　苦樂公
背伸して覗くほどでもない　噴嚏
釣れぬ日の魚籠を覗いて叱られる　某人
背伸してやつと覗けば乞食の子　喜山
覗かれてゐると知つてるコンパクト　水客
覗かれてゐそう見合のお茶の味　喜山

この上に寺あり紅葉散つてくる　水客
清流に近く紅葉の座がきまり　喜山
クレヨンの赤が足りない紅葉谷　某人
火を焚いた跡があるのも紅葉の景　同
薄紅葉溪の曲りでふと止り　紫香
手の屆く處の紅葉むしろしく　秋生
飛石へ紅葉一枚踏まれてゐる　紫香
いゝ紅葉それで結構酒にする　秋生
喧嘩にもならず紅葉へ醒めはじめ　某人
紅葉の徑へ夫婦男の子が欲しい　水客

川雜

岡町支部句會（大阪）

黑川紫香報

耳、便り、客、電車、雜

動かした猫の耳から蠅が飛び　なぼみ
耳遠きまゝに元氣な國の父　卓舟
耳たぶの太い人ゐる三等車　紫香
耳から耳ふと病室の明るすぎ　風葉
福耳を持つて不幸が腑に落ちず　潮花
耳たぶのほこりに氣づく秋の風　水客
戰地への便り子供の手で書かせ　美鳥
就職の便りうれしい雪となり　草水
旅先のスタンプ便りあるもよし　稔幸
安產の便りへ栗の實がはじけ　水客
來客の話は盡きて庭を見る　風葉
お客とは別の想ひの氣をかし　潮花
客のない店へ犬ころ遊びに來　紫香
觀劇の無我の頭へ紙の雪　三笠
夕立に電車ぐつしよりぬれて來る　麻縷子
滿員の電車へ無理な荷がつまれ　美津枝

山麓を曲る電車へ時雨て來　紫香
終電の音郊外の霧に消え　春坊
支那まがひと云ふ火鉢の音を聞く　呑水
包街の火鉢へ暇な妓がもたれ　曉香
火鉢から突然栗の實がはじけ　春坊
美しい顏で煙草も酒もいけ　潮花
展望車紫煙は窓を拔けて消え　紫香
話ふと故郷の事になつて更け　呑水
お話は聞いてゐますと向き直り　潮花
話ふと氣まづくなつて茶をすゝり　紫香

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

香具師、美人、雜吟、出征將士

留守宅訪問、末席、末座

目明き千人盲目千人香具師は喰ひ　芳一
こゝらでと狙ひをきめてさくら買ひ　同
二人連れ夜店の香具師へ遠く立ち　利生
インチキと知りつ香具師にこれ込まれ　正甫
ぼろ蜜にわめかれて買ふ香具師の品　方正
鷹揚に構へた香具師の眼は動き　君女
裸火に香具師の姿の妖くも　栗
香具師の眼に見込まれてゐる二三人　同
角帽を被つて香具師は法螺を吹き　たけを
妙藥を夜店の香具師にきいて來る　同
香具師今日は洋服を着る物を賣り　春集
折柄の飛行機香具師の邪魔をする　同
長れ多い話へ香具師は帽子脫ぐ　同
美人といふ横顏のつめたげれ　栗
目標を美人において病み込まれ　芬一
美しく生れ不遇の褄を持ち　同

吊革のシャンを夕刊からのぞき　たけを
花傘の中に眼に立つ町小町　柳秀
戎橋美人は標準語で歩き　春巣
金持へ裸でとつぐ美しさ　川女
心臓の強さミス日本へ申込み　利生
シャンだらうと頭しやくられる　路生
あたつてみたのか小町を悪くいひ　栗
爆撃のたとへ三越持つて來る　たけを
面會へのつ引きあらぬ名で來られ　同
握手すれば重役の手はまんまるし　路生
神經と主治醫あつさり片づける　君女
病身をかくす煩紅赤くさし　同
不覺にも電車であくびうつされる　春巣
其の椅子に座れば役目物をいひ　芳一
留守宅を訪へば夫人は身重にて　同
茶碗酒義理と人情は知つてます　柳秀
お便所の隅でもハタクコレバクト　利生
えゝことが似ずに悴は二十八　栗
たべ物は大阪だつせさうだつせ　柳秀
靴磨き磨き度い靴前を行く　栗
隱し藝末座のだけか三味に合ひ　方正
末席であつたね言はず酔ふて來る　正甫
末座から踊り出でたる奴さん　同
記念寫眞末席頤をつき出して　栗
落ぶれた母屋末席近うゐる　同
末座では片唾を呑んでゐるばかり　青一路
末座では不平を語る酒を酌み　同
末席は隣り同士で酌みする　利生
末席へおちよちやん電話云つて來る　同
末席へお酌するわと女來る　柳秀
末席であれど會費は同じなり　同
圓卓の末座課長と向ひ合ひ　同
末席は疊の數も讀んで見る　たけを
末席は敷居の上に坐らされ　同
末席は案外酒に強いなり　同
恐れ入ること末席に多過ぎて　同
御免やすと末席の前をゆき　路生
末席は花瓶の松に肩がこり　栗
偉がりの辯に末座に坐つて見　香附子
末席はけがし餘興でみとられ　路耶
末席のあたまにのこる藝者の名　同
遲刻してても末座の人でなし　同

有恒川柳會（大阪）

十一月十六日　於有恒倶樂部

銃後

召集で若き女房の深思案　錦蒲
いつ見ても映畫ニュースに袖しぼる　笑濤
くじのがれせめて銃後と感無量　仙園
千人力書いて涼しい停留所　兆山
時節柄節約にまで應用し　小原
人絹の衣裳花嫁も得心し　雨月
店までも入れて銃後の頭數　松垣
虎の年力の文字を多く書き　乃武路
献納機晴れ渡る空を高く行き　鋭々
又銃後ですかと妻の先手也　同

母、友達　（十一月廿二日）

潔辯の母も子だけは氣にもせず　笑濤
隊長に知れて榮ある母のふみ　兆山
古里に母なき後のさびしさを思ふ　錦浦
電車の中で子供の聲に母と知れ　平三
孝行も母親だけでものたらず　雨月
お医で學士ですと母嬉しさう　乃武路
この人にあの母ありと感じ入り　しげる
立身も嚴格なりし母の恩　小原
ハイキング次から母は除外され　鋭々
結局は埒があかない母と知り　同
もう母とたしなめられて娘は歸り　仙園
太つても痩せても母に案じられ　路耶
友達も趣味が違つたまゝ離れ　錦浦
悪友に誘はれ旅にゐるのなり　平三
友の子に逢うて昔を懐しみ　兆山
同窓會ニックネームで若返り　乃武路
此の俺へなぜ明かさぬと詰つて居　鋭々
このきづは君がつけたと古い友　しげる
アルバムの色褪りして友疎ら　雨月
笑つてはゐられぬ友の手形也　路耶
友達の顔でこしの冬を越し　同

編輯縱橫

▼14年167號の編輯であるADON君に援けられて徹宵ペンを握ぎる。

▼日本人の血は南京を落し、日本人の血は川柳を創作する。あらゆる方面に多事多端であつた一九三七年は本號を以て幕を閉づることとなつた。

▼本誌の上半期は勇躍に次ぐに勇躍を以てしたが下半期は編輯部の病厄が祟つて遂に遲刊の憂き目を見た。しかしながら愛讀者諸君の深甚なる同情に甘えて遲刊に屈せず飽くまで闘ひぬくべく御支援下さつたことが感謝してゐる。

▼雜誌の刊行は長途の旅にも比すべきものである。從つて焦せらずにやつて行く積りである。新春號からは十五日發行に改めたいと思つてゐる。

▼少しの虚榮もない、いつも張りきつた無駄のない雜誌でありたいと思つてゐるので、本號の頁數は出來る丈け切りつめた。しかし新春特輯號でこの埋め合はせはする積りである。

▼「川柳培」の組み方が又變更した。全面的に見て・二段組みで天地が揃へず、行間にゆとりを持つ方がいゝのではないかと思つたので試みた。

▼本號は川柳人協會特輯號として、師走川柳大會の實況を報告することにした。（句稿は次號で發表）

▼前號より引續き「武玉川三編研究」の御寄稿をたまはつてゐる梅本秋農屋、森東魚、姪子省二の諸氏並びに「川柳指導講座」に絶大の努力を拂はれた塚越正光氏の勞を深謝する。

▼本號の刊行に次ぐに新春號の忙しさが私を待つてゐるので年末年始の禮を欠ぐことを今から惧れてゐる。

▼終りに諸賢の御健康を祈る。

（路郎）

川・雜・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢、但し前金切手代用可、句會案內、柳書廣告、その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は桝形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利なので特におすゝめいたします

送賃は本社で負擔いたします

八十枚綴　一冊　金十五錢
同　二冊　金廿五錢

御申込は川柳雜誌社へ
＝切手代用も可＝

染筆頒布

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短册を川柳家に限り左の特價で頒布致します

軸箱入　二十圓・額　二十圓
小物五圓・短册　三圓

御申込は前金で川雜發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本自第二卷至第十一卷　各金壹圓五十錢
第十二卷及十三卷　金參圓

送料大阪市內　一册六錢
市外　一册二七錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

殘本分讓

川柳雜誌の殘本分讓申上ます

第二卷より第十二卷迄一册十錢
第十三卷　一册十五錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

年末年始の御贈答に

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉

川柳の妙味を骨から折ずに味つて貰ふつもりで嚙んで碎いて摂り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である

定價　壹圓
特價八拾錢
送賃　九錢

發行所　大阪市西成區玉出本通三　不朽洞

振替大阪三〇三九二

★不朽洞出版部より

句集の自費出版をのぞまれる方は不朽洞へ御相談下さい。編纂、校正、刊行、販賣についてもお世話いたします。

★川雜宣傳部より

川、雜支部創設及び不朽洞會入會御希望の方は宣傳部宛に御申込み下さい。御懇談申上げます。

★營業部よりのお願ひ

何かの御事情で誌代拂込みが遅れてゐられる方は至急御送金下さい。年末に際しカードの整理をいたして居りますので特にお願ひいたします。

新年用

色紙 短冊 書畫

表裝 風流 文具

年末年始の御贈答に
風流雅品の御用命は

大阪市南區心齋橋筋二丁目
大丸一丁南之辻東入

和正堂

電話南(75)二七五一番
振替 大阪九一七五番

「後の蕉柳」を頒つ桝形四頁三部十錢、切手代用二錢五枚
川柳雜誌社宛

「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて讓受けたし
川柳雜誌社内BB生

漫畫でも來ることなら何んでも大阪筑前橋電停前昭和ビル電話土333漫畫宣傳社

化粧新聞社 懸賞川柳
課題「艶」一月十日
「將軍」二月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す大阪西成區玉出本通三麻生路郎氏宛

麻生路郎
川柳講座
初心の方々はお越し下さい。
一月十六日、卅日午後一時
松坂倶樂部
趣味道場

川柳の世界的進出實現に懸命の研究誌—一部廿錢送料三錢
S・H・K
東京市小石川區初音町四
川柳飜譯研究會

川柳を作る人愛好する人の必讀誌毎月一日發行一部廿錢送料一錢
川柳倶樂部
東京市牛込區揚場町八
川柳倶樂部社

東海の代表誌
川柳草薙
一部一〇錢一年一圓(郵稅共)
名古屋市南區八熊町寺田一一五〇
發行所 草薙川柳社

川柳きやり
菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

京
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊川柳 みちのく
一部十五錢一年一圓五十錢
青森縣黑石町
發行所 川柳みちのく吟社

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十五卷第二號課題

十二月十五日締切（十句以內）

丸帶　池田可宵選

ゴムバンド　阿部閑生選

第十五卷第三號課題

一月廿日締切（十句以內）

ほち袋　長崎柳秀選

舞扇　妹尾變人選

毎號募集

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年十一月廿五日印刷　第十四卷　第十一號

昭和十二年十二月　一　日發行　（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

禁無斷轉載

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番　振替大阪七五〇五〇番

東京市蒲田町女塚町二〇三

支社　川柳雜誌社東京支社

賣捌書店

（大阪）大賣捌大賣書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店

其他　市內各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　國枝史郎　大島壽明
長谷川一徹　藤村作　窪田銀波樓
大道弘雄　藤本卯之助　大谷五花村　安川久留美
岡本一平　赤井清司　大西長三郎　前田雀郎
片岡直方　淺田一　小川武　前田五健
笠原路生　末弘嚴太郎　龜井晟修　食滿南北
嘉納純　田中辰二　川上三太郎　柴谷宰二郎
長崎柳秀　伊藤彦造　川村花菱　篠原春雨
長岡牛太郎　鳥山一歩　米村あん馬　蛭子省二
長野晴濱　沖野岩三郎　田村孝之介　藤里好古
生方敏郎　谷脇素文　小林不涙人
高尾亮雄　森東魚

客員

橋本緑雨　北山悟郎　岩崎柳路
高橋かほる　永谷鮎美　須崎豆秋　大鶴喜由
朝田新水　春元紀太　原史風　西八歩
福田山雨樓　松下小柳子　江戸みつる　大鶴喜由
姫田夕鐘　西いわを　近藤勇　加藤ライト
西田艸樂　村松夢裡　後藤宵兒　島生古弗
永田里十九　市塲沒食子　宮岡白峰　正本水客
山本丹路　吉田水車　石曾根民郎　黑川紫香
★　妹尾變人　中西おさむ　丸尾潮花

不朽洞會員

川柳雜誌社

主幹　麻生路郎

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
國館支部（國館市）　龜井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
田邊支部（和歌山）　辻左馬
籔川支部（島根縣）　尼綠之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
御旅支部（大阪市）　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）　竹内機見女
今里支部（大阪市）　市寥沒食子
今治支部（今治市）　渡邊鴎童
光笑會（大阪市）　永田里十九
伯者支部（鳥取縣）　三鴨美笑
十三支部（大阪市）　竹原支部（廣島縣）　松井可笑
臺中支部（臺灣）　淺野耕牧人
兵庫支部（神戸市）　宮内朝幸
廣島支部（廣島市）　三崎陽幸
名古屋支部（名古屋市）　濱田久米雄
岡町支部（豊中市）　吉田水車
丸尾潮花

安産のためにワダカルシユーム錠

なぜ……母体は……疲弊するか？

胎兒の劇しいカルシューム要求と食物よりのカルシューム攝取不足は必然的に母体を疲弊に陷らしめ、姙娠中多發する母子体の諸種の疾病は實にかゝる所に重大原因をもつてゐる事は醫學界に認むる所である。

大阪帝大教授片瀬淡博士は多年之が研究に沒頭され、母体のカルシューム攝取によつて姙娠分娩が安全に經過し、且授乳期に偶發する母子体の疾病を豫防し乳質を可良ならしむる事を實驗されたがわがワダカルシュームこそは諸姙婦に必要不可缺の常備藥でなければならぬ

楢林醫學博士 推奬
片瀬醫學博士 監査

姙娠の方へ急告

新案特許 安産メーター進呈

正しい分娩日が一と目で判る安産メーター及び大阪帝國大學教授醫學博士片瀬淡氏述安産のためにの冊子ハガキにて申越次第逐代進呈

發賣元
大阪道修町 和田卯助商店